

〈共同討議Ⅰ〉

## 啓蒙期ヨーロッパにおける儒教情報の流入

井川 義次

カントの哲学はヨーロッパの哲学に革新を与える独自性・優越性をもつといわれる。この件については汗牛充棟の研究の蓄積がある。他方、昨今では欧米、日本においてカントに先行する哲学との対比や影響の有無についての実証的研究が勃興してきた。ライプニッツやクリスチャン・ヴォルフ等のカント哲学への流入ドイツについては、ノルベルト・ヒンスケ氏、Wenchao Li氏、日本の山本道雄氏、石川文康氏等の重厚な業績がある。ところで周知のように、ライプニッツやヴォルフは理性の時代～啓蒙の時代にかけて中国哲学情報について当代一流の知見を有していた。彼らに対する中国哲学の影響に関する研究が急速に増加しつつある。であるとすれば、その世代の後を承けたカントは東洋思想から特定の影響を間接的に受けた可能性は否定できないであろう。発表者は、中国哲学カント哲学への直接的影響について評価する資格はない。本発表ではあくまで儒教翻訳文献のヨーロッパへの輸送・流入の初期の姿について論究するにとどめた。たとえばイエズス会士と儒教との関連に関する先行研究について、ザヴィエル以来のキリスト教布教の効率化のための現地思想等の情報の習得・理解の実情について言及した。その後ライプニッツにおける中国哲学情報について、「四書」に関わる最初期のマルティニ訳、ルッジェリ訳『大学』の格物致知説の内容を分析し、またクリスチャン・ヴォルフの『普遍的实践哲学』と『中国実践哲学講演』に対するフランソワ・ノエル『中華帝国の六古典』、フィリップ・クプレ『中国の哲学者孔子』における『大学』ならびに天命の理と人間本性の関係「性即理」説の根拠とされた『中庸』の訳文について考察を加えた。さらには、ライプニッツ、ヴォルフを継承し、青年カントが物理学に志を立てた際に参照した物理学者・哲学者・中国研究者でもあったベルンハルト・ビルフィンガーの『古代中国道徳・政治学』における儒教〔とりわけ朱子学〕研究について一瞥した。とりわけ『永遠の中庸 *Medium sempiternum*』——『中庸』——における「中和」の思想や、相反する両者の見解を吟味判断する「舜の中庸」に関連する部分について検討し、カント以前にカントと親和的、あるいは類似した発想が実在したことについて紹介した。